The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ニュージーランドにおける先住民文化と医療 : Hauora Māori
Author(s)	小杉, 世
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2007, 2006, p. 17-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77329
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ニュージーランドにおける先住民文化と医療

——Hauora Māori——

小杉　世

1．はじめに

副題の"Hauora Māori"とは「マオリの健康」という意味である。マオリ語で「健康」を表す言葉は、他にも'waiora'や'oranga'などがある。これらの表現に共通する'ora'とは、「生命」の意で、ちなみに'hau'は「風、息」、'wai'は「水」である。英語の medicine（薬、医療）にあたるマオリ語は'rongoā' であるが、これは薬草などの薬を表す名詞であると同時に、 'preserve, take care of' 'apply medicines to'といった意味をもつ動詞でもある（Williams 436）。本稿は、1980 年代以降を中心に、ニュージーランド先住民マオリの間で医療や健康の問題がどのようにとらえられてきたかを考察する。先住民言語政策や土地回復運動といった広い枠の中で医療改革を位置づけ、また、それらの問題が 1980 年代後半から 1990 年代のマオリ文学にどのように反映されているかを論じる。

2．医療の脱植民地化：1980 年代の動向

1980 年代は、ニュージーランドにおいて、先住民マオリの知識人たちが医療の脱植民地化を唱えた時期である。1984 年 3 月にオークランドの Hoani Waititi Marae で開催された集会 Te Hui Whakaoranga (The Department of Health Seminar on Maori Health) は、マオリの健康の概念の見直しがナショナルな次元で行われたひとつの転機であった。その集会で、Ben Couch（the Minister of Māori Affairs）が、マオリの健康、パケハの健康といった区分はないと述べたのに対して、健康とは社会経済的な要素に大きく左右されるものであるから、現実にその区分はあるのだという反論がなされた（Spicer 200-201）。1980 年代のマオリの知識人たちが求めたのは、植民地時代の悪影響が現在のマオリの社会経済状況に未だに尾をひいているという現状を踏まえた上で、共同体の中で受け継がれてきたマオリの文化遺産を足場として、自らの手で、マオリのための医療を築いていくという方向性である。

1980 年代には、西洋医学と違った目で「健康」を再定義する動きがみられた。マオリの精神医学者 Mason Durie は、1983 年、ハミルトンとオータキで開かれた会合で、健康（hauora）の構成要素として、「四壁のモデル（te whare tapa whā model）」とよばれるものを提唱した（Spicer 196）。Durie は、マラエ（マオリの集会所）の建物のたとえを用いて、健康はマラ

エの 4 面の壁のように、"taha wairua (the spiritual side), taha hinengaro (thoughts and feelings), taha tinana (the physical side), taha whānau (family)" の四つの要素が支えあって成り立つものであると述べる（Durie 1994: 70）。また Durie は、1985 年の論文 "Māori Health Institutes" の中で、健康は "land (whenua), family (whānau), and language (reo)" (65) の三つの要素を基盤とすると述べている。これらは、健康や医療の問題を holistic にとらえるものである。

1980 年代におけるマオリの医療に関する改革は、それに先立つ 1970 年代の土地や先住民言語の回復運動といった一連の動きの中でとらえられる。1970 年代は、第二次世界大戦後に急激にすすんだマオリ人口の都市化の結果、従来の土地に根ざした共同体のあり方や家族構成の変化（拡大家族から核家族へ、あるいは、単身での居住へ）、マオリ語を話す話者の数の激減といった、大きな変化の波がマオリの共同体を揺さぶり、それまで辿ってきた同化の道を見直さざるを得なくなった時期であった。この時期がくしくもニュージーランドにおいて、医療費削減のために精神病院の数が減らされた'deinstitutionalization'の政策の時期と重なることは皮肉である。

Duric は deinstitutionalization の政策がもたらした問題を指摘している。ニュージーランドでは 1940 年代から 1950 年代にかけて、電気ショック療法やロボトミーなどの精神外科医療が隆盛をきわめた。8 年間にわたる精神病院体験（200 回以上電気ショック療法を強制的に受けさせられた）をもとに小説を書いたスコットランド系三世のニュージーランド人作家 Janet Frame（以下フレイム）の小説 *Owls Do Cry* (1957)、*Faces in the Water* (1961)、*Scented Gardens for the Blind* (1963)、*Intensive Care* (1970) などには、フレイムが入院を体験した 1940 年代半ばから 1950 年代半ばのニュージーランドの精神病院の現状に対する批判が描かれている。[1] そののち、1973 年から 1996 年までの間に、精神病患者のための病床数は 10,000 から 2,000 に減らされた（Durie 2001: 223）。この時期に、ニュージーランドの大きな精神病院の多くが閉鎖された。（フレイムが入院していた南島の Seacliff 精神病院などもこの時期に閉鎖されている。）しかし、この政策は、監禁を批判するフーコー的な思想によるものというよりは、社会保障国ニュージーランドが抱えていた大きな医療費の削減という経済的な理由によるものだった。この政策によって、患者のケアにかかる経済的負担は、地域共同体や家族にかかってくるようになった。1960 年代から非マオリの精神病患者の入院数が減少していくのに対して、マオリの精神病患者入院数は増加しはじめ、1970 年には、マオリの精神病院入院指数は男性が人口 10 万人対 186 人、女性は人口 10 万人対 203 人に達し、マオリと非マオリの精神病院入院指数が逆転した（Spicer 326）。のちにあげる表 5 からわかるように、マオリ男性の精神病院入院指数は、1984 年にはさらに増えて、非マオリ男性のおよそ 1.8 倍になっている。マオリ人口のうち都市に住むマオリの人口率は、1945 年から 1986 年の間に 26％から 80％に増えた（Spicer 323）。第二次世界大戦後のこのよう

[1] Janet Frame の小説と 20 世紀半ばのニュージーランドの精神医療についての考察は、小杉世「ニュージーランドにおけるポストコロニアル主体の形成――アルファベットの外縁を求めて――」『カルチュラル・スタディーズの理論と実践』（大阪大学大学院言語文化研究科、2001 年）pp. 73-86 に詳しい。

な急速な都市化によって、生まれ故郷の土地と共同体から離れ、患者を支えるべき共同体や家族集団（whānau）が患者のそばに存在しなくなった時代に、この deinstitutionalization の政策がすすめられたのである。長年の投薬治療と多くの障害を引き起こした精神外科治療を受けさせられたのちに、受け皿としての機能を果たさないコミュニティに、患者は放り出されることになった。結局、多くのマオリ患者は再入院している。

マオリの精神病入院患者には、警察や監獄を通して強制入院させられた患者（special patient）の割合が 25%（1988 年のデータ）と非常に高い。非マオリではその割合は 8%にすぎない。1988 年の調査の時点で、マオリはニュージーランドの総人口の 12%であるにもかかわらず、マオリの'special patient admissions'の精神病患者は全体の 67%を占めている（Spicer 327）。マオリやアボリジニーなどマイノリティ先住民の投獄率や獄中死亡率の高いことはしばしば指摘されるが、その背景にはマイノリティに対する社会的な偏見や差別などの事情がある。1991 年の統計では、20 歳から 24 歳のマオリの投獄指数は人口 1 万人対 523、同年齢の非マオリは人口 1 万対 64.5 で、マオリの指数は 8 倍も高い（Spicer 328）。さきに言及した 1960 年代以降から 1980 年代にかけてのマオリの精神病患者に関する統計データからは、マオリ人口の都市への移動にともない、生活環境の変化、都市における白人社会への同化に伴うストレス、家族や親族から離れて暮らすことのストレスなどから、精神のバランスを崩すマオリ患者が増加したことが伺える。さらに同じ時期に deinstitutionalization の政策がとられたことによって、新しいヘルス・ケアの組織ができる前に病院から退院させられ、受け皿からあふれたマオリの患者が、警察を通して精神病院に送られるという悪循環の図式がよみとれる。

Durie は "Māori Health Institutions" (1985) の中で、植民地時代にイギリスが定めた The Native Land Act (1865) などによって、土地所有権の個人化がすすめられ、西洋個人主義の理念に基づいて拡大家族の解体が行われたことが、マオリの精神的健康に危害をもたらしたことを指摘し、"the person in her own right" という西洋的な概念は、マオリにとっては不健康な概念であると述べている（Durie 1985: 68）。Durie は、先に述べた deinstitutionalization の影響が当時の精神医学界において最も差し迫った問題であると述べる。彼が問題とするのは、精神病患者の病床数の削減によって多くの患者たちが受け皿のない社会へ送り返されたというその事実だけでなく、それ以前の植民地化の過程や第二次世界大戦後のマオリ人口の都市化によって、「先祖の土地、親族集団（拡大家族）、自らの部族の言語」（Durie 1985: 66）といった'hauora'（健康）の核となるものから隔絶され、属する場所をもたないマオリの人口が増えたという根本的な意味での 'deinstitutionalization'、すなわち、マオリの共同体組織そのものが解体されてしまったという問題である。1980 年代以降、このような問題に対する対策がさまざまな形で講じられた。拡大家族のかわりの役割を担う the Matua Whangai Scheme などはそのひとつである。

1980 年代以降、コミュニティやマラエを母体にしたメンタル・ヘルス・ケア・センターやヘルス・ケアのネットワークが作られていく。マラエのような小さな規模のコミュニテ

ィがヘルス・ケアの機能を果たすことの利点は、「医者が信用できない」「遠くの病院へ行く交通手段 / 交通費がない」といった理由で病院へ行かない患者の間で、医療へのアクセスがよくなることである。1983 年には Waahi marae にコミュニティのヘルス・ワーカーが配置された。また、北島ハミルトンを拠点とする Hauora Waikato Māori Mental Health Services のようにコミュニティレベルで活動する組織が生まれた（Durie 2005: 228）。Whaiora Home Care Services は、1988 年オークランド郊外の Otara のマラエを拠点として、高齢者を対象に始まった在宅ケア、デイ・ケアの組織である。筆者が訪れたハミルトンの Kōhanga Reo のマオリの女性教員の中には、身体的・精神的な疾患のある一人暮らしのマオリの老人の訪問ケアを副業とする人もいた。共同体ベースの組織やネットワークによって、マオリの老人がマオリの介護者をもつことができれば、被介護者が介護者に対して感じるストレスや不安は、大いに軽減される。

3．統計にみるマオリの健康の現状

1984 年の Te Hui Whakaoranga の大会で、マオリ発展省大臣が "There is no such thing as Māori health or Pākehā health" と述べて反論を呼んだことはさきほども言及したが、医療改革による改善を経た現在の統計データを見ても、マオリと非マオリの間の格差はやはり存在する。ここにあげるのは、政府が公開している 2000 年から 2004 年の統計調査による平均余命や疾病に関するデータ（表 1～表 4）、および 1970 年と 1984 年に行われた精神病院入院患者の統計調査の比較データ（表 5）である。それぞれ必要な情報を編集して表にした。これらの統計によれば、マオリ人口は非マオリ人口に比べて、心臓疾患、喘息、気管支炎、癌、リュウマチなどほとんどの疾病において、発病率が高い。平均寿命は 20 世紀半ばには非マオリ人口とマオリ人口の間には 14 歳から 16 歳の格差があったが、その格差は縮小されたとはいえ、2001 年の統計でも、非マオリ人口に比べて、マオリ男性は 8.16 歳、マオリ女性は 8.73 歳短い。また、2001 年の統計では、何らかの障害をもつ人の割合はマオリ人口全体の 21％（1994 年には 36％であった）であり、これも非マオリ人口の 19％に比べ高い。0 歳から 14 歳の子供に限ってみれば、マオリでは 15％、非マオリは 10％と両者の開きは大きくなる。[2] 自殺に関する統計データでは、とくに 15 歳から 24 歳の青年層の自殺率が非マオリの 2 倍以上高いことが目立つ。表 5 の精神病院入院指数では、1970 年の調査で 15 歳から 24 歳のマオリ女性が同年齢の非マオリに比べて 1.5 倍以上、1984 年の調査では同じ青年層のマオリ男性が同年齢の非マオリに比べて 2.4 倍以上高いことが目立つ。今は大部分がヨーロッパ系ニュージーランド人と同じように都市で暮らしている（がゆえに発生するのかもしれないが）マオリの間に、非マオリに比べてこれだけの格差があることは、コロニアリズムのもたらしたマテリアルな影響の根深さを物語っている。劣悪な生

[2] この数値は、*Living with Disability in New Zealand* (2004) 第 8 章 "Māori and Disability"に基づく。
http://www.moh.govt.nz/moh.nsf/238fd5fb4fd051844c256669006aed57/35c56e093758b96fcc256f320007bdfb?OpenDocument

活環境におかれた植民地時代に遺伝子に刻まれた負の痕跡は簡単には消えない。また、失業率の高さやヨーロッパ系ニュージーランド人にくらべて平均収入も低いといった負の社会経済的要因は、肉体的にも精神的にも健康に大きな影響を与えていると思われる。

表１：０歳における平均余命（平均寿命）

Year	Māori males	Māori females	Non-Māori males	Non-Māori females
1951	54.05	55.88	68.29	72.43
1961	59.05	61.37	69.17	74.51
1971	60.96	64.96	69.09	75.16
1981	64.24	68.98	70.76	76.86
1991	65.12	70.28	73.36	79.23
2001	68.99	73.18	77.15	81.91

※この表は、ニュージーランド国勢調査（New Zealand Census Mortality Study）による修正版の数値に基づく。http://www.maorihealth.govt.nz/moh.nsf/indexma/figure-4-data-source

表２：循環器系疾病による死亡指数（cardiovascular disease indicators）

indicator	Māori	Non-Māori
Total cardiovascular disease mortality, 35+ years, 2000-02, rate per 100,000	549.4	204.5
Heart failure mortality, 35+ years, 2000-02, rate per 100,000	12.3	4.2
Rheumatic heart disease mortality, 15+ years, 2000-02, rate per 100,000	12.6	1.4

※この表は http://www.maorihealth.govt.nz/moh.nsf/indexma/cardiovascular-disease に基づく。

表３：呼吸器系疾病（喘息・慢性閉塞性肺疾患）による入院指数

indicator	Māori	Non-Māori
Asthma hospitalisation, 5-34 years, 2002-04, rate per 100,000	273.3	140.6
COPD hospitalisation, 45+ years, 2000-02, rate per 100,000	1717.9	408.2

※COPD — chronic obstructive pulmonary disease

※この表は http://www.maorihealth.govt.nz/moh.nsf/indexma/respiratory-disease に基づく。

表４：自殺による死亡指数

indicator	Māori	Non-Māori
Suicide mortality, all age groups, 2000-02, rate per 100,000	16.5	10.2
Suicide mortality, 15-24 years, 2000-02, rate per 100,000	34.9	16.0
Suicide mortality, 25-44 years, 2000-02, rate per 100,000	30.1	18.4
Suicide mortality, 45-64 years, 2000-02, rate per 100,000	11.0	12.4

※この表は http://www.maorihealth.govt.nz/moh.nsf/indexma/suicide-intentional-selfharm に基づく。

表５：1970 年と 1984 年の精神病院入院指数 (age-specific rates per 10,000 population)

	-15 years		15-24 years		25-44 years		45-64 years		65+ years		total	
1970	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F
Māori	7.3	6.0	32.3	43.5	23.0	29.2	17.0	13.6	24.2	14.5	18.6	20.3
Non-Māori	4.4	3.5	24.2	28.6	23.3	25.9	19.7	20.4	24.8	25.6	17.0	18.3
1984	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F
Māori	2.8	2.1	47.4	30.0	37.8	26.5	14.0	8.9	11.5	7.6	22.2	14.9
Non-Māori	3.5	2.2	19.5	17.1	16.6	14.9	11.7	12.0	17.7	15.0	12.2	10.8

※この表は Pōmare (1988), p.116 に基づく。この統計には、再入院は含まれていない。

４．現代に生きる伝統医療の概念

医療の議論の中で昨今、'plural medicine' あるいは 'alternative medicine' という言葉がはやっている。日本でも世界でも西洋医学の外に立った異なる医学の言説が評価されるようになりつつある。世界保健機関（WHO）は、1978 年の「アルマアタ宣言（Declaration of Alma-Ata)」で、必要によっては伝統治療師たち（traditional practitioners）の力もとり入れるという指針を示している。1980 年代にはじまったマオリの医療改革がめざしたものは、医療の世界にバイカルチュラリズムをもち込むことである。

マオリ語の'tohunga'という言葉は、技を極めた人、すなわち「匠」にあたる言葉で、'medicine man'のほか、文脈によっては芸術家や作家も指す。マオリの tohunga は、薬草などを用いて病気を治療する知識をもつほか、霊媒として先祖の霊と交信をしたり、予言をしたり、夢の意味を解したり、karakia（祈祷）によって精神的、肉体的な病を治癒したり、呪詛をかけたりする。つまり、漢方医者と霊媒と精神分析医と呪術師（神主）を合わせたような性格をもつ。政治的なリーダーである 'rangatira' と同様に精神的なリーダーである tohunga はマオリの共同体の中で敬われ、呪詛（makutu）をかける能力をもつことから、ときには恐怖の対象でもあった。日本では針治療や指圧療法などの東洋の民間医療は医療が西洋化された後も残り、地鎮祭や厄払いといった神事は変わらず神主によって執り行われている。第二次世界大戦後、神道は国家宗教としての特権を失ったが、神道や仏教の祭事が外からの権力によって、民間レベルで禁止されるということはなかった。また針師が追放されるということもなかった。

ニュージーランドでは、植民地支配時代に、伝統医療師は西洋医学の発展と浸透の妨げになるという医学的理由から、また人々に精神的な影響力を有する tohunga たちの力が植民地支配の妨げになるという政治的理由から、1907 年に Tohunga Suppression Act が制定され、tohunga はその活動を禁止された。法的には抑圧されても tohunga はなくなったわけではない。1968 年にこの法律は廃止され、再び tohunga は「部族の伝統の担い手」("the carriers of tribal culture") (Durie 1996: 11) としての地位を認められる。Tohunga Suppression Act (1907) によって近代西洋医学から排除された伝統医療の概念が、1980 年代以降、再評価された。

Mason Durie は、先祖から受け継いだ伝統や言語や土地などに親しむ権利と同様に、患者は自らが望む形態の医療（伝統医療にせよ、西洋医学にせよ）を受ける選択の権利を保障されねばならないと主張し、医療関係者のほとんどが非マオリであるという現実に対して、"plural medicine"の実現をめざして、マオリが自律性（autonomy）を確保できる医療制度を自らが主体となって築いていく必要性を説く。もちろん、伝統医療を再評価するといっても、伝統医療とは共同体の文化の素地に根ざすものであり、その文化は変容するものであるから、現代の現実と接点を失った伝統医療はもはや意味をもたない。伝統医療も時代と共に変化する必要を Durie は見ている。「部族の伝統の担い手」である tohunga は、部族の生存（hauora）そのものをつかさどる指導者でもある。1992 年には、Ngāti Otara marae で tohunga が集い、1993 年に Ngā Ringa Whakahaere o Te Iwi Māori (the National Board of Māori Traditional Healers Inc.) という組織が正式に結成された（Durie 1996: 5）。現在この組織には全国の 30 の 'whare oranga' (癒しの家) と呼ばれる tohunga の診療所にあたる施設が登録されており、住民による利用の橋渡しをしている。

生活の中で役に立つ薬草の知識を伝えるという試みが今も続いていることは、書店に並ぶ子供用絵本の中に、マオリのおじいさんが孫に薬草について説明するというような教育的絵本が英語版、マオリ語版で 2, 3 種類目につくことを見てもわかる。*Ngā Rongoā a Koro* (2004) はそのひとつで、都会に住むマオリの少年が、田舎のおじいさんのもとへ遊びにきて、そこでおじいさんにいろいろなことを教えてもらい、別れを惜しみながら帰っていくというストーリーである。7 種類の薬草が紹介されるが、最後にあげられている薬は 'aroha' (love)である。別れ際に悲しい顔をするおじいさんに、少年は「ぼくはおじいさんの心の痛みを治す薬を知っているよ」といって抱きつき、薬草の知識と引き換えにおじいさんに最も大切な薬である 'aroha' を与える。

伝統医療の見直しは、ニュージーランドに限らない。パプア・ニューギニア大学のメンバーが行っている共同研究、パプア・ニューギニアの薬草の研究は、そのフィールド・ワークに植物学者だけでなく、文学者が関わっているところがユニークである。パプア・ニューギニアの詩人・文学者である Steven Winduo は、自らの出身の言語地域で人々が薬草として用いる 170 の草を採集し、フィールドノートを作って、論文にまとめている。その意図は、薬草の名前を自分の部族の言語で学び、薬草をめぐる文化知識体系を記録することであるという（Winduo 16）。多様な言語環境をもつパプア・ニューギニアにおいて、Winduo は識字教育にも携わり、多くの若手作家たちの作品を編集し出版するだけでなく、村落の識字セミナーに参加したごく普通の人々の書き物を収録してもいる。その Winduo にとっては、パプア・ニューギニアの様々な地域言語やピジン英語で書かれた短編や詩を拾い上げて編集するのも、やはり書き留めなくては日の目を見ずに忘れ去られてしまう多くの薬草の名前やそれらにまつわる習慣や知識を書き留めるのも、基本的に同じ行為なのだろう。文学者が薬草についての論文を書くというこの一見意外な越境研究は、medicine man がもつ文化的な役割を考えるとき、そう意外なものではない。なぜなら、medicine man とは、

薬草などを用いて病を治癒する医者であると同時に、あらゆる祭事を執り行う呪術師、言葉を操る者であるからだ。文学と医学は根本的なところでつながっているのである。

5．マオリの楽器、音楽のもつ癒しの力（Medicinal Use of Taonga Pūoro）

マオリの楽器（taonga pūoro）は、‘alternative medicine’のひとつの形態でもある。マオリの楽器は創世神話に起源がある。抱擁しあっていた Rangi-nui（天空）と Papatūānuku（大地）の間で窮屈な思いをしていた息子たちの一人である Tāne-mahuta（森の神）が力づくで Rangi-nui と Papatūānuku を引き離して、光がさすこの世界が生まれた。しかし、それは森と風と海の神々の間の壮絶な争いの幕開けであった。Tāne-mahuta の娘の一人である Hine-pū-te-hue（「瓢箪笛を吹く娘」の意）は、父親たちの怒りをなだめようと、Tāwhiri-mātea（風の神）の怒号の吐息を体にはらみ、その怒りの息を神々（人）の心を和ませ赤子を寝かしつける甘い音楽に変えた（Moorfield 162）。こうして、Hine-pū-te-hue は瓢箪笛の神となった。これがマオリの音楽の起源である。マオリの楽器は、その始まりから癒しと関わりをもっていたことがわかる。

マオリの吹奏楽器には、大小さまざまな大きさの瓢箪笛のほか、木、鯨の歯、動物の骨、グリーンストーンなどで作った‘kōauau’や‘nguru’といった小ぶりの笛、男性と女性の二種類の声を出すための二つの吹き口をもつマオリ特有の笛‘pūtōrino’などがあるが、特に‘kōauau’は、出産の痛み、モコ（刺青）を彫るときの痛み、死別の痛みなど、肉体的・精神的苦痛を和らげるために吹かれ、また、農作物がすこやかに育つようにという祈祷的な意味でも吹かれる。その他、吹奏楽器、打楽器といった分類のできないもののひとつとして、木や石や骨でつくった薄い楕円形の板に二つの穴をあけて紐を通し、ひものよじれを引き伸ばすことによって板を回転させ、ブーンという低い振動音を発する‘porotiti’とよばれる楽器がある。これは、頭痛を和らげる効果があるといわれる。また、眠っている子供の胸や鼻の上で‘porotiti’を鳴らすと、気管支をふさいでいる痰がきれたり、鼻づまりがなおるといわれる。最近では、この楽器の発する超可聴音（ultra-sound）が、振動として腕から全身に伝わり、リュウマチや関節炎の痛みを和らげたり、関節をしなやかにする効果があることも科学的に指摘されている（Flintoff 57, Moorfield 169）。

マオリの楽器で奏でられる音楽は、もともと風の音、波の音、鳥の鳴き声、葉ずれの音、人の泣き声など、自然界にある音を模倣したものである。また笛を吹きながら同時に声を発するという独特の演奏法があって、自然の音、楽器の音、人間の声がわかちがたく交錯した不思議な音感を伴う。筆者はマオリ語の授業の中で、二人の奏者がいくつかのマオリの楽器を即興演奏するのを聴いたが、そのとき全員、目を閉じて聞くように指示された。目を閉じてその吐息とも鳴き声ともつかない音、自然界の風の動きのように、ふと途切れてはまた始まる、いつ終わるともわからない音楽（メロディーなどはない）に耳を澄ませていると、坐禅をしたときのような精神の研ぎ澄まされる思いがした。これは非科学的な個人の印象にすぎないが、ミュージック・セラピーの効果は十分にあると思われる。

6．環境と健康（Te Ao Tūroa me te Hauora）
——ポストコロニアル・エコロジー小説としの *The Whale Rider* (1987)

マオリにとって、部族の土地は 'mana' (prestige) と 'mauri' (life force) を与えてくれるもの、自らのよって立つ場所（tūrangawaewae）であり、植民地時代に奪われた土地を回復しようとする運動は健康（hauora）を追求する行為と解される。マオリの先祖の土地に家を建てる'Papakāinga Housing Scheme'（Pōmare 1995: 148）もこのような運動のひとつである。

環境に加えられる危害は、マオリにとっては心の健康に加えられる危害でもあると主張するマオリの知識人は多い（Durie 1985: 65, Pōmare 1988:120）。Witi Ihimaera（以下イヒマエラ）の *The Whale Ride* (1987) は、そのような主張をあらわすポストコロニアル・エコロジー小説である。*The Whale Rider* は映画にもなって、多数の国で上演され、イヒマエラの小説の中で最も一般によく知られた作品となった。映画で切り捨てられた要素のひとつは、鯨の世界を描いた部分である。映画では、舞台となる北島東海岸の村ファンガラのマオリのコミュニティが物語の中心となっていて、鯨の脳裏をよぎる思いや回想は語られない。それに対して原作の小説では、鯨の物語と人間の物語が並列して描かれる。その二つの物語が出あう場所がファンガラの海岸である。南太平洋で繰り返される核実験によって海底にできた新たな傷跡をみつめながら、広がる放射能の網から逃れて群れを南へ導く鯨の長は、放射能が子孫に及ぼす影響を案じている。そのようすは、主人公の少女 Kahu（映画では Paikea）の曾祖父で村の長（rangatira）である Koro Apirana が村の将来を案じるようすと重なる。また、年老いた鯨の長とそのつがいの雌鯨との間でかわされるやりとりは、Kahu の曾祖父母の姿と重なる。原作の小説には、核実験や捕鯨など環境に関するメッセージ性が多く含まれている。また、1982 年の Kōhanga Reo の創設など、1980 年代の先住民言語の 'hauora' を促進する運動が実りつつあった当時の社会の動きも言及される。

ツアモツ諸島付近の核実験で海を追われた鯨の群れは南極へ逃れるが、氷の壁に阻まれ、鯨の長は最期の死に場所を求めて、ニュージーランド沿岸にむかって北上する。年老いた鯨の長の頭をよぎるのは、その昔、鯨と人間が言葉をかわせた時代、まだ人間が敵ではなかった時代に、自分の主人であった Kahutia Te Rangi の回想である。Kahutia Te Rangi（またの名を Paikea）は北島東岸の部族 Ngāti Porou の英雄であるが、老鯨はその昔、こよなく愛したこの主人を背に乗せて、ハワイキからアオテアロアにやってきたのだった。鯨の長は再びその海岸をめざした。

一方、ファンガラの村では、長の Koro Apirana が後継者となる男が村にいないことを嘆いていた。マラエに村の男子を集め'wānanga'（学びの集会）を開いて、'haka'（マオリの踊り）や 'taiaha'（槍）や 'mōteatea'（部族の歌）を教え、肉体的、知的、精神的に優れた男子を後継者として選ぼうと 7 年がかりでふさわしい少年を探しているが、村の少年たちは一人も長の課す最終的な試験に通らない。女性であるために 'wānanga'に入ることを曾祖父から許されなかった Kahu は、曾祖父に隠れながら、wānanga の授業を盗み聞いて、先祖から伝わる部族の知識を学ぼうとする。Kahu は学校での成績もよく、マオリ語のスピー

チコンテストにも優勝して、村のどの少年よりもすぐれた素質をもっているが、Koro Apirana は認めようとしない。

ある日、鯨の群れがファンガラからそう遠くない海岸に打ち上げられ、救助作業もむなしく、200 頭の鯨が死んだ。座礁した鯨の群れが浜で死んでいく光景に、また、その鯨の肉を先を争って解体する白人業者たちの繰り広げる血まみれの光景に、村のマオリたちは、自分たち自身の死を見る。植民地時代に白人入植者に土地を奪われ、物理的にも文化的にも時代の波に翻弄されたマオリの村人たちもまた、この鯨のように生きる力を失っているからだ。翌日、Kahu たちの住むファンガラの村の浜辺に、額にモコの模様のある大鯨、死に場所を求めてやってきた鯨の老長に率いられた一群が座礁する。Koro Apirana は、「もし鯨を海にかえすことができたら、かつて自然と人間の間にあった調和がまだ存在することの証になる。鯨が生きれば我々も生きる。鯨が死ねば我々も死ぬ」("if we are able to return it [the whale] to the sea, then that will be proof that the oneness is still with us. . . . If it [the whale] lives, we live. If it dies, we die" 116) というが、彼には鯨を海にかえす力がない。

主人公の少女 Kahu は、その昔、鯨の背に乗って、この島にやってきたという（あるいは鯨に身を変えて海を渡ってきたという）同じ名の先祖 Kahutia Te Rangi がそうであったように、動物と意思疎通をはかる能力（"power to talk to whales" 114）をもつ。それは、現代人が失ってしまった力、昔の tuhunga がもっていた力である。その力をもって、少女は鯨の群れを再び生命の海へ導き、疲弊した共同体の中に土地と先祖の精神的な絆の力を取り戻し、新たな mauri (生命力) をもたらす。この小説では、村全体（あるいは部族全体）の生命の存続と、鯨という自然（環境）の一部であるものの生命の存続が重ねあわされている。共同体の存続（hauora）をテーマとしたこの小説は、部族の伝統の保持と、自然との調和（"the original oneness of the world" 115)、人と人の絆、そういったもろもろの要素に支えられて村の共同体の生命の存続がありえるのだということを示している。

7．言語と健康（Te Reo me te Hauora）——Hone Kouka: *Waiora* (1996)

自分たちの言語（先住民言語）を保持することは、アイデンティティの問題と切り離せない。言葉を奪われること、（そして土地とのつながりを失うこと）は、死に等しい。そのことを示すのが、Hone Kouka の 1996 年初演の戯曲 *Waiora* である。'waiora'とは「生命 (ora) の水 (wai)」の意で、そこから転じて「健康」の意味でも用いられる。'Te Waiora ā Tāne' という表現は、Edward M. K. Douglas によれば、Tāne-mahuta（森の神）の恵みの雨を意味する（Douglas 5)。マオリ語には、水を表す言葉がいくつかある。'waitai'（潮水)、'waimāori'（真水、あるいは岩清水)、'waimate'（死んだ水、mauri=生命力を含まない水、生命を育まない水)、'waikino'（汚染された水、災いをもたらす水）などである。表題の *Waiora* は、ニュージーランド北島の東海岸の架空の村の名前として作中に登場するが、それは同時に、万物のすこやかな成長をうながす生命の糧となる水のことである。清めの儀式に使われるのもこの'waiora'である（Douglas 5)。（ただし、部族によって習慣は異なり、たとえば、北

島東海岸の Ngāti Porou は、waiora ではなく waitai を清めの儀式に用いる。)

この戯曲は、1965 年のニュージーランド南島の東海岸を舞台に、北島の東海岸の架空の村 Waiora から移住したマオリの家族を描く。父親の Hone (John) は、白人の雇い主に気に入られて昇進することを夢みており、息子や娘にマオリ語を話すことを禁じる。Hone は白人社会に適応し、同化するため先祖から受け継いだマオリの遺産を忘れ去ろうとした世代の登場人物である。Roma Potiki はこの戯曲の前書きで、これを 20 世紀のマオリたちの多くが体験した"genocidal amnesia" (9) と呼んでいる。Hone は、娘 Rongo の 18 歳の誕生日に、故郷でよく歌っていた歌を歌おうとするが、マオリ語の歌詞を思い出せない("I forgot it. We only been away for a while and I'm forgetting already" 19)。Hone とその家族が故郷に残してきたもの、白人社会での新しい生活の中で忘れ去ろうとした世界を象徴するものとして、'the Tīpuna' (先祖) とト書きで呼ばれる 4 人の人間が常に Hone たちの周辺を行き来する。その姿は Rongo にしか見えない。Tui のように美しい声で歌う Rongo は、南島に越してから父親にマオリ語で話すことを禁じられると、人前では声が出なくなり歌えなくなってしまう。しかし、声を奪われた自閉症の少女の苦悩に家族の誰も気づかない。Rongo はひとりで海辺に行っては、遠くのハワイキ (マオリがもと住んでいたという土地で死んだ人の魂がかえるところでもある) を思う歌を歌い、亡くなった祖母に話しかける。

> *Rongo is down at the beech. . . . She is silent, but her mouth is moving. Slowly, the waiata she is singing fades up and we hear it. The waiata is 'Tawhiti'. The Tīpuna have quietly raised their voices with her.*
>
> *Tawhiti, kei Hawaiiki pāmamao,*
> *Kei Rangiātea nui. . .*
> *Auē, tawhiti e . . .*
>
> *Rongo:* . . . . Kei te mahara ahau ki ngā pao, ngā waiata, ngā haka arā te katoa. . . . <u>I am standing in the water so I can touch home</u>. Kei te whānui ngā ringaringa o Tangaroa hei awhi . . . . <u>So if I am held in those hands, I am taken back to the beach of Waiora, our true home</u>. . . . Nanny, <u>I'm so hungry, not for kai, but for words.</u> Here, we kōrero Pākehā, not Māori. Not allowed to. . . . <u>Scared I'll waste away to a whisper, then nothing, and I will forget our words</u>. . . . We are stopping ourselves from speaking the reo. . . . <u>We will be a lost people</u> first. . . . (30, emphasis added)

海の水に足を浸すと、Rongo は故郷の水の感覚を思い出す。海は唯一彼女を故郷 ("the papa kāinga" 15)である Waiora につないでくれる場所である。マオリ語でしゃべることを禁じられた Rongo は、自らの存在自体が消えて無くなってしまう恐怖を感じている (波線部)。

弟の Boyboy が停学処分をめぐって父親と言い争うさなか、Rongo は家を抜け出し、先祖の霊の声に誘われて海へ入り、入水自殺を図る。'waikino' (彼女を溺死される水である

と同時に彼女を精神的に圧迫するパケハ社会の生活環境）に呑まれて仮死状態に陥ったRongoは、弟と父親が歌うハカの言葉の力によって、奇跡的に息を吹き返す。言葉（te reo）は`waiora`を少女の枯れた魂に注ぎ、`waikino`から彼女を救ったのである。そして、家族は文字通り、彼らにとって「生命の水」である故郷の土地Waioraに帰ることを決意する。

マオリの少女の自殺を描いた小説は、他にもAlan Duffの*Once Were Warriors* (1990) などがある。*Once Were Warriors*の映画で自殺する13歳の少女Graceを演じた同じマオリ女優が、1996年初演の舞台で自殺する18歳の少女Rongoを演じている。表4の統計で15歳から24歳のマオリ女性の自殺率が現在も高いこと、表5の1970年の調査で15歳から24歳のマオリ女性の精神病院入院指数が高いことを述べたが、このような現実の状況をこれらの小説は反映している。南島のthe Dunedin Multidisciplinary Health and Development Studyの調査によれば、思春期や青年期にあって「地理的な（住居の）移動」（"residential mobility"）を体験した場合、精神病の発病率が高くなる傾向があるという (Spicer 128)。北島東海岸のマオリの村からマオリ人口の少ない南島へ移住したRongoは、そのよい例であろう。先祖の霊の声を聞き、他の人々に見えない幻覚を見るRongoは、西洋的な概念でいえば統合失調症であるが、マオリの概念でいえば、`matakite`（超自然的なものを見たり予言をする能力のある人）である。Rongoの病は、父親が不健全にも断ち切ろうとしたマオリの世界の価値や先祖や土地との絆が失われてしまうことの危うさを示す徴である。

この戯曲では、言葉（te reo）に象徴的な力が与えられている。健康（hauora）を支えるものとしての役割である。マオリ語を禁じた植民地時代の学校教育に加え、20世紀後半のマオリ人口の都市化によって、話者数が大きく減ったマオリ語を、再び自らの民族遺産として再生させようというKōhanga Reo Movements (マオリ語トータル・イマージョンの幼稚園を全国に開設するという運動) や 1986 年のマオリ語の公用語化などの一連の動きを支えているのも同じ理念である。1984年のTe Hui Whakaoranga に参加したKōhanga Reoの関係者は、我々はマオリの健康に大いに貢献することになると述べた（Pōmare 1995: 148）が、まさに言語を守ることは、マオリの子供たちのポジティブな民族的誇りとアイデンティティをはぐくむことにほかならない。また、物理的な次元でもKōhanga Reoは、両親を集めて子育てや衛生や栄養摂取についての勉強会を開くなどの活動も行っており、子供と両親のためのヘルス・センターの役割を果たしている（Pōmare 1988: 49）。筆者は先住民言語教育のリサーチのためKōhanga Reo および Kura Kaupapa Māori における実地調査を行い、これらの教育機関で育った学生が多く入学する大学のマオリ学科のトータル・イマージョンのコースなどを聴講したことがある。その体験からも、これらの教育機関で育った若者がより確固とした自信と誇りをもっていることを実感した。[3]

---

[3] Sei Kosugi, "Indigenous Language Education, Media and Literature: Postcolonial Formations in Aotearoa New Zealand"『ポストコロニアル・フォーメーションズ』（大阪大学大学院言語文化研究科，2006年）pp. 53-64を参照。この報告書で論じたHone Koukaの戯曲*Waiora*についても言及している。

8．おわりに

以上、1980年代にマオリの視点から医療や健康の問題が再定義され、先住民言語復興運動や土地回復運動などの社会運動と共通する理念のもとに医療改革がすすめられてきたことをみた。1970年代から1980年代に実施された精神病院の解体に伴い、コミュニティやマラエを母体とするヘルス・ケア・センターの重要性が増した。Kōhanga Reoなどの幼児教育施設もまたヘルス・センターとして機能する。1980年代のマオリの指導者たちが唱えた医療のバイカルチュラリズムの導入は、医療機関にとどまらず、刑務所においても、the Hawke's Bay Regional PrisonのTe Whare Tirohanga Māoriと呼ばれるマオリのための収容施設などに見られる（Durie 2005: 229）。このようなマオリのための収容施設では、収容者はマオリ語、ハカやタイアハ（槍を使った武術）やその他の伝統手工芸などの授業を受けることができる。これは収容者たちが自分たちの属する伝統文化に対するよりポジティブな意識や誇りを獲得するための手助けとなる。精神病院においても、マオリの彫刻や織物その他の伝統手工芸がマオリの患者の'occupational therapy'として用いられている（Durie 2005: 234）。また、マオリの伝統楽器には、近年はやりの'plural medicine' 'alternative medicine'と呼ばれる西洋の医療以外のオプション、異なった療法としての機能をみることができる。1980年代と1990年代のマオリ文学には、環境・先住民言語・共同体と健康といった1980年代の問題意識が映し出されていることも論じた。

少子化・高齢化の著しい日本と違って、マオリはその人口の37.5%が15歳以下の若年層である（Durie 1994: 214）。Kōhanga Reo（言葉の巣）と呼ばれるマオリ語トータル・イマージョンの教育を受けて成人した新しい世代が、しっかりと高齢層を支えていく可能性がある。近年、DVD『精神医学：死を生み出している産業』(2006) を出版した団体 CCHRなどが、資本主義産業と医療の共犯関係を暴いている。またBBCのドキュメンタリーもインドなどの第三世界で民間人が欧米の製薬会社の実験の対象として搾取されていることを批判している。[4] いずれの場合も、医療の制度は支配者（大国）がつくるものであり、搾取される被害にあうのは弱者、マイノリティー(移民や先住民を含む)である。臓器移植などの医療倫理の問題も同様である。かつてFrantz Fanonは精神医学の言説が宗主国の言説であるという認識に立って、その言説に抵抗を試みた。ヨーロッパ系ニュージーランド人が多数を占める医療の現場で、マオリが自律性を保てる医療制度を希求するMason Durieの主張は、健康の文化的・精神的指標である言語と固有文化の健全な維持をめざす教育改革が実りつつある今、その力に支えられて新たな局面を生む可能性があると思われる。

※ 本稿の作成にあたっては、文部科学省科学研究費助成金（基盤研究B『近代における文学と医学の交渉』および若手研究B『オセアニア・南太平洋における先住民文学文化と移民文学の

[4] 「目覚める大国インド：新薬開発の舞台裏」BBC2006年制作のドキュメンタリー。2007年2月5日BS1で放送された。

研究』）を受けた。

引用文献

Couch. Ben. "Opening Speech" *Hui Whakaoranga: Māori Health Planning Workshop*. 1987.

"Declaration of Alma-Ata" International Conference on Primary Health Care. Alma-Ata. USSR. 6-12 September. 1978. http://www.who.int/hpr/NPH/docs/declaration_almaata.pdf

Douglas. E. M. K. ed. *Waiora, Waimāori, Waikino, Waimate, Waitai: Māori Perceptions of Water and the Environment*. Hamilton: U of Waikato. 1984.

Drewery. Melanie. *Ngā Rongoā a Koro*. Wellington: Huia Publishers. 2004.

Durie. M.H. "Māori Health Institutions" *Community Mental Health in New Zealand*. 2. 1 (1985): 63-69.

——. *Whaiora: Maori Health Development*. Auckland: Oxford UP. 1994.

——. *A Framework for Purchasing Traditional Healing Services: A Report Prepared for the Ministry of Health*. Massey University. Dept of Maori Studies Te Pūmanawa Hauora. 1996.

——. *Mauri Ora: The Dynamics of Māori Health*. Melbourne: Oxford UP. 2001.

Flintoff. Brian. *Taonga Pūoro: The Musical Instruments of the Māori*. Nelson: Craig Potton Publishing. 2004.

Ihimaera. Witi. *The Whale Rider*. Auckland: Reed Publishing. 2003. (1st 1987)

Kouka. Hone. *Waiora*. Wellington: Huia Publishers. 1997. (First performed in Wellington in 1996.)

Moorfield. John C. *Te Māhuri*. Auckland: Pearson Education. 2003.

Pōmare. Eru W & Boer. Grail M. *Hauora: Māori Standards of Health: a study of the years 1970-1984*. Wellington: Department of Health.1988.

Pōmare. Eru. et al. *Hauora: Māori Standards of Health III: a study of the years 1970-1991*. Wellington: Eru Pōmare Medical Research Centre.1995.

Spicer. John. et al eds. *Social Dimensions of Health and Disease: New Zealand Perspectives*. Palmerston North: Dunmore Press. 1994.

Williams. M.A. *Dictionary of the Māori Language*. Wellington: Legislation Direct. 2002.

Winduo. Steven. *Indigenous Knowledge of Medicinal Plants in Papua New Guinea*. Macmillan Brown Centre for Pacific Studies Semminar. 30 March 2006. http://www.pacs.canterbury.ac.nz/documents/Steven%20Winduo%20Macmillan%20Brown%20Seminar.pdf